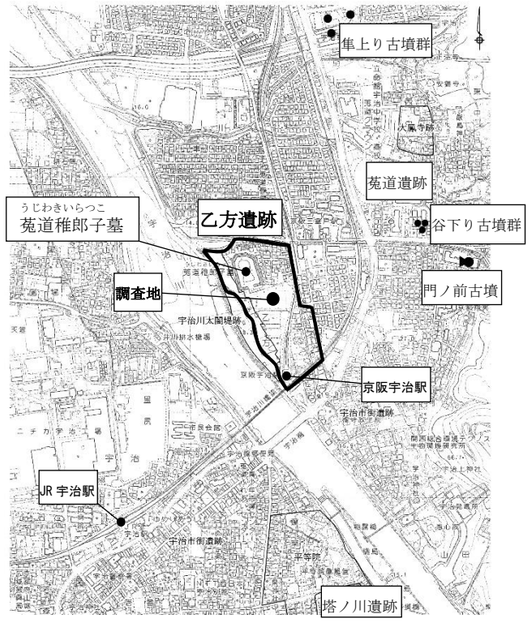
乙方（おちかた）遺跡発掘調査　現地説明会資料

調査場所	宇治市菟道丸山 203-1	名　称	乙方遺跡
調査担当	宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課　℡（0774）21－1602		
発掘理由	（仮称）宇治川太閤堤跡歴史公園交流ゾーン整備に伴う遺跡の記録作成		
調査期間	平成 26 年 9 月 26 日～平成 27 年 7 月 31 日（予定）		
調査面積	923 ㎡	掘削深度	1.5m
検出遺構	川跡	出土遺物	須恵器・土師器・弥生土器

１．はじめに

今回の調査地が所在する宇治乙方地区は、宇治川が狭隘な谷あいを抜け平野に流れ出す谷口部右岸の宇治橋東詰めに位置しています。また、調査地は京阪宇治線と宇治川堤防に挟まれた場所にあります。さらに、調査地よりも標高が高い東部の高位丘陵地からはいくつもの小河川が流れ出ており、扇状地形を形成し、宇治川に注いでいました。



乙方遺跡と周辺遺跡 位置図

東部の丘陵地では古墳時代前期から中期の古墳や須恵器・瓦の窯跡群が分布し、中位段丘から丘陵の裾部にかけて古墳時代から奈良時代の集落跡や古墳時代後期の古墳が、乙方遺跡のある低位段丘面では弥生時代から古墳時代の集落跡が確認されています。

また、乙方遺跡の地形は大きく２つに分けることができます。標高 16m台の低地部分と標高 18m前後の低位段丘面であります。この低位段丘面は乙方遺跡のある宇治川右岸では、宇治川に沿って確認されています。宇治川右岸の宇治から菟道にかけての地域は宇治市内の中でも最も遺跡の集中する地域のひとつであり、各時代を通して中核的な地域であることがわかります。

乙方遺跡は宇治川に面した場所で各時代の遺跡が重複しています。古くは旧石器時代、弥生時代、古墳時代などの遺物や集落跡、古墳など、新しくは江戸時代の瓦窯跡や明治期のレンガ窯跡が確認されています。

２．調査概要

今回の調査は（仮称）宇治川太閤堤跡歴史公園の整備に伴って、地域観光交流センター建設予定地内の遺跡の記録を作成する目的で実施しています。発掘調査では、調査地を北東から北西に流下する川跡がみつかりました。川跡は近代の粘土取穴や掘り込みによって部分的に削平を受けていましたが、埋土からは弥生時代から飛鳥時代の土器がみつかりました。

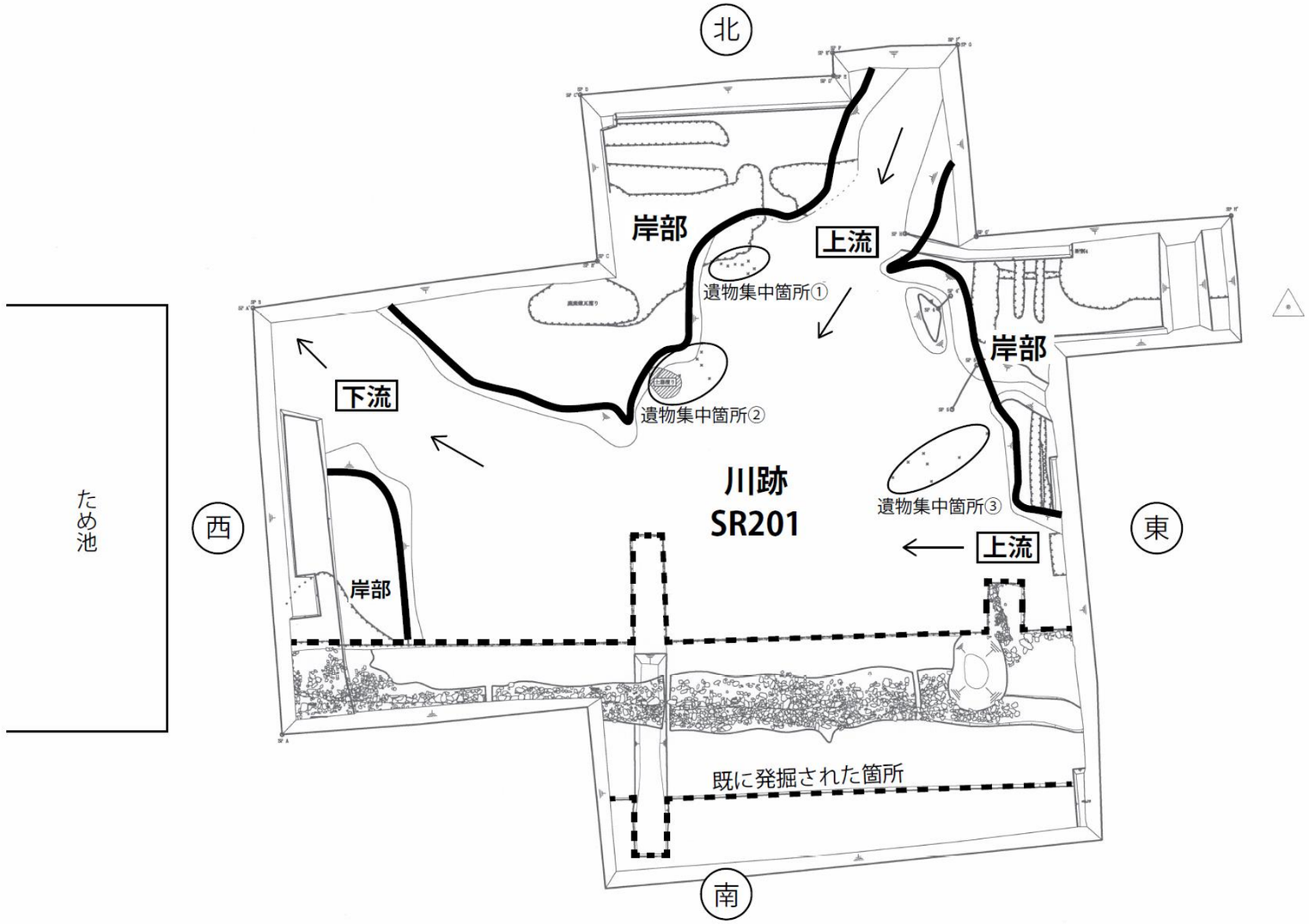
川跡の埋土は大きく上層と下層の２層に分けることができます。上層からは飛鳥時代（６世紀末～７世紀代）の須恵器と土師器がみつかりました。また、上層の埋土の中には一部古墳時代の後期後半（６世紀後半）の須恵器もみつかりました。川跡の下層からは弥生土器がみつかりました。弥生土器は弥生時代中期のものだと比定されます。

このことから発見された川跡は弥生時代から飛鳥時代まで継続して流れていたことがわかります。また、みつかった須恵器や土師器、弥生土器の大半は川の岸部に近い箇所から比較的まとまって出土しており、北側の岸より投棄された土器がそのまま残っていると考えられます。

また、川跡の下からは、拳大から人頭大の円礫が含まれる灰色の砂層が確認できました。この円礫を含む砂層は遺物を含まず、下層も同様の円礫を含む砂層が続いていることから有史以前より形成される河川堆積であると思われます。

３．まとめ

これまでの乙方遺跡の発掘調査では、今回の調査区の南側で弥生時代中期～古墳時代後期の竪穴建物などが確認されています。今回の調査でみつかった川跡はおおよそ東から西へ流れており、その北側の岸から土器を投棄している状況が確認できました。それらの土器は弥生時代中期から飛鳥時代のものです。このことから、川の南側だけでなく、川の北側にも集落が広がっている可能性が考えられます。今回の調査で乙方遺跡の集落形成についての重要な情報を得ることができました。今後遺物も含めた遺跡の詳細な検討を通して、各時代における乙方遺跡の集落復元を目指してゆきたいと思っています。



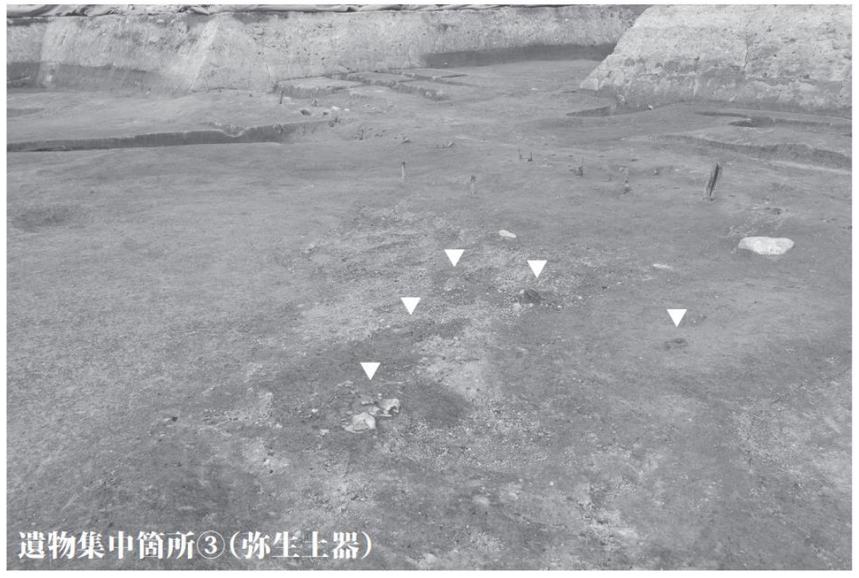
＜発掘調査区 平面図　縮尺 1 / 200＞

検出状況全景（南西から）

完掘状況全景（南西から）

遺物集中箇所①（須恵器・土師器）

遺物集中箇所②（須恵器・土師器）


遺物集中箇所③（弥生土器）